

発行 中山かんのん

恩林寺



中山中学下、電話三四一―一二四五

忠言は耳に逆らう

秦の始皇帝の死後、真つ先に都に入ったのは後に漢を建国する劉邦でした。競争相手である楚の項羽に先んじたことの喜びと、美女と財宝に囲まれて、すっかり気が緩み有頂天になったのを勇将が戒めるのが劉邦は勇将の言うことなど聞き入れようともしません。

その時、軍師の張良は「忠言は耳に逆らい、良薬は口に苦し」と、目の前に広がる贅沢に我をわすれているのでないかと、論ずるのです。「もつともな忠言は、さぞや耳障りでしょうが、良薬は口には苦いですが病気にはよく効くものです。どうか勇将の忠告をお聞き入れください。」

この一言で劉邦は莫大な財宝と美女に囲

まれ、有頂天の自分に気が付いたのでした。

その時は不愉快だったり、辛かったり、自尊心を傷つけられたりするけれども、あとになって功を奏するのが忠言とか叱責というものです。

劉邦でなくても他人の忠言(忠告)というものはなかなか素直に受け入れにくいものです。それが的を得た言葉であればあるほど人は素直になれないものです。聞く耳を持つ。人の忠言を素直に受け入れる。これには勇気がいります。軌道修正のチャンスです。他人のおべんちやら、誉め言葉はいつも耳に心地よく、それがお世辞と分かっているも、つい、まんざらでもない気分になってしまふのですから人間の心とは厄介なものです。

よく、人の上に立つ人は常に、自分と反りの合わない人を傍に置き、と、言いますが、こうしたこと由来し、忠言が本当の自分を取り戻す絶好の機会であることを知るべきでしょう。

大香炉を奉納

市内山田町に工房を構える飛騨照見窯、長倉 研様より大香炉二基が奉納されました。お施餓鬼法要などの大きな法要の時、大薫香という長尺線香をたきますがスペース充分、また、大勢の方の抹香焼香にも十分に対応できます。一基は本堂正面焼香台、一基は弘法堂、お大師様前に設置させていただきます。ご厚意に感謝申し上げます、謹んでご報告申し上げます。 住職合掌